

□ 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。

昨今、「正しさは人それぞれ」とか「①みんなちがってみんないい」といった言葉や、「現代社会では価値観が多様化している」「価値観が違う人とは結局のところわかりあえない」といった言葉が流布しています。このような、「人や文化によって価値観が異なり、それぞれの価値観には優劣がつけられない」という考え方をX主義といいます。「正しさは人それぞれ」ならまだしも、「絶対正しいことなんてない」とか、「何が正しいかなんて誰にも決められない」といったことさえ主張する人もけっこういます。A

こうしたことを主張する人たちは、おそらく多様な他者や他文化を尊重しようと思っているのでしょう。そういう善意はよいものではありませんが、はたして「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか。そもそも、「正しさ」を各人が勝手に決めてよいものなのか。それに、人間は本当にそれほど違っているのかも疑問です。

あ、価値観の異なる人と接触することがなかったり、異なっているでも両立できるような価値観の場合には、「正しさは人それぞれ」と言っているても大きな問題は生じません。たとえば、訪ねることも難しい国の人たちがどのような価値観によって生活しているても、自分には関係がありません。またたとえば、野球が好きな人とサッカーが好きな人は、スポーツのネタでは話が合わないかもしれませんが、好きなスポーツの話さえしなければ仲良くできるでしょう。サッカーが好きなのは間違っていて、すべての人は野球が好きでなければならぬ、なんていうことはありません。B

② こうした場面では、「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」でよいでしょう。しかし、世の中には、両立しない意見の中から、どうにかして一つに決めなければならない場合があります。たとえば、「日本の経済発展のためには原子力発電所が必要だ」という意見と、「事故が起こった場合の被害が大きすぎるので、原子力発電所は廃止すべきだ」という意見とは、両立しません。どちらの意見にももつともな点があるかもしれませんが、日本全体の方針を決めるときには、どちらか一つを選ばなければなりません。原子力発電所を維持するのであれば、廃止した場合のメリットは捨てなければなりません。逆もまたしかり。「みんなちがってみんないい」というわけにはいかないのです。

そんなときには、どうすればよいでしょうか。「価値観が違う人とはわかりあえない」のであれば、どうすればよいの

でしょうか。

そうした場合、現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまいます。本来、政治とは、意見や利害が対立したときに妥協点や合意点を見つけたためのはたらきなのですが、最近では、日本でもアメリカでもその他の国々でも、権力者が力任せに自分の考えを実行に移すことが増えています。批判に対してきちんと正面から答えず、単に自分の考えを何度も繰り返したり、論点をずらしてはぐらかしたり、権力を振りかざして脅したりします。

そうした態度を批判するつもりで「正しさは人それぞれだ」とか「みんなちがってみんないい」などと主張したら、権力者は大喜びでしょう。い、もしもさまざまな意見が「みんなちがってみんないい」のであれば、つまりさまざまな意見の正しさに差がないとするなら、選択は力任せに行うしかないからです。「絶対正しいことなんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」というのであればなおさらです。決定は正しさにもとづいてではなく、人それぞれの主観的な信念にもとづいて行うしかない。それに納得できない人とは話し合っても無駄だから権力で強制するしかない。こういうことになってしまいます。C

つまり、「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」といった主張は、多様性を尊重するどころか、異なる見解を、権力者の主観によって力任せに切り捨てて正当化することにつながってしまふのです。これでは結局、「力こそが正義」という、困った世の中になってしまいます。それは、権力など持たない大多数の人々（おそらく、この本を読んでくれているみなさんの大部分）の意見が無視される社会です。

う、どうしたらよいのでしょうか。

よくある答えは、「③科学的に判断するべきだ」ということです。科学は、「客観的に正しい答え」を教えてくださいと多くの人は考えています。このように、さまざまな問題について「客観的で正しい答えがある」という考え方を、

Y主義といいます。探偵マンガの主人公風に言えば、「真実是一つ!」という考え方だといってもよいかもしれません。先ほどの相対主義と反対の意味の言葉です。「価値観が多様化している」と主張する人たちでも、科学については普遍主義的な考えを持っている人が多いでしょう。「科学は人それぞれ」などという言葉はほとんど聞くことがありません。

そして実際、日本を含めてほとんどの国の政府は、政策を決めるにあたって科学者の意見を聞くための機関や制度を持っています。日本であれば、各省庁の審議会（専門家の委員会）や日本学術会議などです。「日本の経済発展のために

原子力発電所は必要なのか」「どれぐらいの確率で事故が起こるのか、事故が起こったらどれぐらいの被害が出るのか」といった問題について、科学者たちは「客観的で正しい答え」を教えてくださいに思えます。

ところが、実は科学は「Z」ではないのです。科学者の中にも、さまざまな立場や説を取っている人がいます。そうした多数の科学者が論争する中で、「より正しいような答え」を決めていくのが科学なのです。それゆえ、「科学者であればほぼ全員が賛成している答え」ができあがるには時間がかかります。みなさんが中学や高校で習うニュートン物理学は、いまから三〇〇年以上も昔の一七世紀末に提唱されたものです。アインシュタインの相対性理論や量子力学は「現代物理学」と言われますが、提唱されたのは一〇〇年前（二〇世紀初頭）です。現在の物理学では、相対性理論と量子力学を統一する理論が探求されていますが、それについては合意がなされていません。合意がなされていないからこそ、研究が進められているのです。

最先端の研究をしている科学者は、それぞれ自分が正しいと考える仮説を正当化するために、実験をしたり計算をしたりしています。え、科学者に「客観的で正しい答え」を聞いても、何十年も前に合意が形成されて研究が終了したことについては教えてくださいますが、まさしく今現在問題になっていることについては、「自分が正しいと考える答え」しか教えてください cannot. ④ある意味では、「科学は人それぞれ」なのです。

そこで、たくさんの科学者の中から、自分の意見と一致する立場をとっている科学者だけを集めることが可能になります。東日本大震災で福島第一原発が爆発事故を起こす前までは、日本政府は「原子力推進派」の学者の意見ばかりを聞いていました（最近また、そういう時代に逆戻りしつつあるような気がしますが）。アメリカでも、トランプ大統領（在任二〇一七〜二〇二一）は地球温暖化に懐疑的な学者ばかりを集めて「地球温暖化はウソだ」と主張し、経済活動を優先するために二酸化炭素の排出の規制を緩和しました。

権力を持つ人たちは、もっと直接的に科学者をコントロールすることもできます。現代社会において科学研究の主要な財源は国家予算です。そこで、政府の立場と一致する主張をしている科学者には研究予算を支給し、そうでない科学者には支給しないようにすれば、政府の立場を補強するような研究ばかりが行われることになりかねません。D

このように考えると、科学者であっても、現時点で問題になっているような事柄について、「客観的で正しい答え」を教えてください cannot. ではどうしたらよいのでしょうか。自分の頭で考える？ どうやって？

この本では、「正しさ」とは何か、それはどのようにして作られていくものなのかを考えます。そうした考察を踏まえて、多様な他者と理解し合うためにはどうすればよいのかについて考えます。ここであらかじめ結論だけ述べておけば、私は、「正しさは人それぞれ」でも「真実是一つ」でもなく、人間の生物学的特性を前提としながら、人間と世界の関係や人間同士の間の関係の中で、いわば共同作業によって「正しさ」というものが作られていくのだと考えています。それゆえ、多様な他者と理解し合うということは、かれらとともに「正しさ」を作っていくということです。

これは、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といったお決まりの簡便な一言を吐けば済んでしまうような安易な道ではありません。これらの言葉は、言ってみれば相手と関わらないで済ますための最後通牒ちようぼくです。みなさんが意見を異にする人と話し合った結果、「結局、わかりあえないな」と思ったときに、このように言うでしょう。

「まあ、人それぞれだからね。」**E**

ともに「正しさ」を作っていくということは、そこで終了せずに踏みとどまり、とことん相手と付き合うという面倒な作業です。相手の言い分を受け入れて自分の考えを変えなければならないこともあるでしょう。それでプライドが傷つくかもしれません。しかし、傷つくことを嫌がっているのは、新たな「正しさ」を知って成長していくことはできません。

最近、「正しさは人それぞれ」と並んで、「どんなことでも感じ方しだい」とか「心を傷つけてはいけない」といった感情尊重の風潮も広まっています。

お、学び成長するとは、今の自分を否定して、今の自分でないものになるということです。これはたいへんに苦しい、ときに心の傷つく作業です。あえていえば、成長するためには傷ついてナンボです。若いみなさんには、傷つくことを恐れずに成長の道を進んでほしいと思います（などと言うのは説教くさくて気が引けますが）。

（山口裕之『みんな違ってみんないい』のか？ 相対主義と普遍主義の問題』ちくまプリマー新書）

問一 次の文は、本文中のある段落の最後にあったものである。本文中の[A]～[E]のどこに補うのが適当か。一つ選んで答えなさい。

対話はここで終了です。

問二 空欄 あ 〽 お にあてはまる言葉として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア つまり イ なぜなら ウ しかし エ たしかに オ では

問三 傍線部①「みんなちがってみんないい」について、以下の(I)(II)の問に答えなさい。

(I) この題名の詩を作った人物を、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 樋口一葉 イ 津田梅子 ウ 金子みすゞ エ 与謝野晶子

(II) この言葉によって引き起こされる危険性について筆者はどのように考えているか。本文中から五十八字で抜き出し、初めと終わりの三字を答えなさい。

問四 空欄 X Y それぞれにあてはまる言葉を本文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問五 傍線部②「こうした場面では、『人それぞれ』『みんなちがってみんないい』でよいでしょう」と言えるのはなぜか。三十文字以内で説明しなさい。

問六 傍線部③「科学的に判断するべきだ」とあるが、ここで言う「科学的判断」とは具体的にどのようなことを指すか。解答欄に合う形式で、本文中から三十文字程度で抜き出しなさい。

問七 空欄 Z にあてはまる言葉として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 一辺倒 イ 一枚岩 ウ 一朝一夕 エ 一網打尽

問八 傍線部④「ある意味では、『科学は人それぞれ』なのです」とあるが、これはなぜか。その理由を説明したものとして最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 最先端の研究で科学者が合意に至っていないことは、それぞれの科学者が自分が正しいと思う仮説が正しいかどうか実験などを通して検証しているから。

イ 科学者によって研究内容や研究方法は様々なので、一般的に「科学的に真実である」と考えられていることでも、科学者によって見解が異なることがあるから。

ウ 権威ある科学者の考えというのは、実は時の政治家などの権力者の意向を汲んだものであることが多いため、世界各国の立場によって科学的な見解も異なるから。

エ 実験の結果はその実験を行う環境や条件に左右されてしまうことが多いので、一見「客観的で正しい答え」を教えてくれるようで本当はそうではないから。

問九 本文に書かれている内容の説明として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 人間は社会的な動物である以上、「正しさはひとそれぞれ」とか「みんなちがってみんないい」というのは理想論に過ぎず、成り立つことは不可能である。

イ 人々の意見が対立することは仕方がないことであり、その中から妥協点を見つけ出すためには、権威や権力を持った人の意見に従うのが理想的である。

ウ 異なる意見を調整するための尺度として「科学的か、科学的でないか」という基準を用いることがあるが、これが最適なものであるとは必ずしも言えない。

エ 対話を通してお互いの違いを乗り越えていくことは、時には痛みを伴った自己の変容を余儀なくされることがあるが、それは自己の成長にも繋がるものである。

② 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。
おきなな
幼馴染みである女子高生のナツミとマキは、ある日偶然学校帰りのバスで一緒になる。久々に会った二人は、バスの座席に並んで座って会話をしている。

ナツミはふと勘のようなものが働いた。

「もしかしたら、不幸の手紙、来たの？」

「うん」

それを聞いたナツミは、少し迷ったあとで言った。

「わたしのところにも、来た」

「うそー」

「ほんと」

「いやね」

「とつてもいや」

ナツミは、昨日の夜、お父さんとお母さんの言い争いを耳にしているとき、わたしが不幸の手紙を出さなかったせいでこのまま離婚なんという事になったらどうしようかと不安を覚えたことを思い出した。そんなことになったら、きょうだいのいないわたしはどうしたらいいんだろう……。

「それって、最近のこと？」

① マキちゃんが探るような口調で訊ねてきた。

「うん、最近」

「こっちも最近」

互いにそう言い合うと、一拍置いてから二人はほとんど同時に大きな声を上げた。

「ということは！」

「ということは！」

そして、マキちゃんが小さくうなずきながら言った。

「わたしたちの知り合いが出したのかもしれないね」

「そうかもしれない」

「小学校の同級生かな」

「たぶん、そうじゃないかな」

「誰だろう」

「誰だろう……」

ナツミに届いた不幸の手紙はまちがいなく女の子が書いた字だった。ナツミは小学校のときの同級生の女の子を思い出そうとした。あんな手紙を出しそうな人といえば……。

考えていると、マキちゃんが訊ねてきた。

「誰かに出した？」

「出してない」

「出す？」

「うーん、出さないつもりだけど」

「でも、出さないと不幸になるって……」

「そんなのうそ、迷信よ」

ナツミが言うと、マキちゃんが珍しく自信のなさそうな声を出した。

「もし、ほんとに不幸なことが起きたらどうするの？」

そのとき、もしかしたら、自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんを書いたのではないかという気がした。だから、最初にわたしの顔を見て、あんなに驚いたのかもしれない。

「ねえ、マキちゃん……」

ナツミがそれとなく訊ねようとすると、すぐうしろの席に座っているおばあさんが声を掛けてきた。

「ちよっと、あなたたち」

「あっ、はい」

ナツミは返事をしながら、しまったと思った。少し大きな声でしゃべりすぎてしまったかもしれない。うるさいと注意されることになるのだろう。その前に、すみません、と謝ろうとしたが、おばあさんが口にしたのはまったく違っていた。

「あなたたち、どうするつもり」

何を言われているかわからず、ナツミはマキちゃんと顔を見合わせた。

「不幸の手紙よ」

どうやら、おばあさんはこちらの話を聞いていたらしい。

「出しなさい」

二人が黙っていると、おばあさんは繰り返した。

「出した方がいいわよ」

「でも……」

ナツミが言いかけると、異様に低い声でおばあさんが言った。

「出さないとあとで後悔するようなことが起きるわよ」

すると、その横に座っていたおじいさんがおばあさんに向かって小さな声で言った。

「やめなさい」

「あなたは黙ってて！」

おばあさんが鋭い声ではねつけた。その声は静かなバスの中でことさら大きく響いた。ナツミには乗客の全員がこちらに意識を向けたのがわかった。

「もしかしたら何も起きないかもしれない。でも、万一起きたとき、後悔するわよ。出しておけばよかったって」

おばあさんが低い声で言い、ナツミはマキちゃんとまた顔を見合わせた。

「そんなこと、起きますか」

マキちゃんがいくらか体を斜めうしろに向けながら言った。

「子供を亡くした人があるわ」

おばあさんがまったくA調子で言った。

「手紙を出さなかったからよ」

「……………」

二人が黙っていると、おばあさんはひとりごとのようにつぶやき出した。

「ああ……出せばよかった……出していれば……あんなことは起こらなかったのに……言うことを聞いたばかりに……あなたは……わたしひとりで何もできなかったのに……」

おじいさんがもういちどおばあさんに言った。

「やめなさい」

すると、おばあさんは急に気がついたような声の調子で訊き返した。

「何がですか？」

「もういいから」

「どうしてですか？」

「もういいから、やめなさい」

おじいさんの声に厳しい響きがかもったように聞こえた。おばあさんは、さっきとは違って、脅えたような声を出した。

「わたしは……ただこのお嬢さんたちに注意をしてあげているだけなのに……」

そして、それきり黙り込んでしまった。

②バスの乗客が耳をそばだてているのがわかった。ナツミはマキちゃんとしやべるのをやめて、窓の外を見た。マキちゃんはカバンから携帯電話を取り出してメールをチェックしはじめた。

やがてうしろの席でおじいさんが手を伸ばして降車用のプザーを押す気配があり、バスが次の停留所で停まると立ち上がった。おばあさんは、ナツミたちの席の後を通るとき、立ち止まって声を掛けた。

X

二人は黙って軽く頭を下げた。

バスが発車すると、マキちゃんが小さな声で訊ねてきた。

「手紙、いつ来たの？」

「えーと、三日前」

「うちも三日前」

本当だろうか。もしそうだとしたらマキちゃんが出たのではないということになる。

「もう、時間がないよね」

マキちゃんが憂鬱そうに言った。

「まあね」

「まあねって、明後日までに出さなくちゃいけないんじゃない」

「どうして」

「あれって、五日以内に出さないといけないんでしょ」

「五日以内？」

「五日以内に出さないと不幸になるって書いてあったでしょ」

「五日以内なんて書いてなかった」

「うそ」

「ほんと」

「じゃあ、なんて？」

「一週間以内に出せって」

「五日以内に二人に出せ、でしょ？」

「違うよ、一週間以内に五人に出すの」

そう言ったとき、ナツミはすごく重要なことに気がついた。

「そうか、別の種類の不幸の手紙なんだ」

マキちゃんも弾んだ声で言った。

「違う人から届いたんだ」

だとすれば自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんが出したのではないということになる。マキちゃんの声が弾んでいるのも、わたしが出したのではないとわかったからかもしれない。わたしが疑っていたのだからマキちゃんがそう思っていたとしても不思議ではない。

「いいなあ」

マキちゃんが羨ましそうに言った。

「何が」

「そっちは、一週間に五人でしょ、こっちは、五日に二人だからたいへんだよ」

「どっちも、よくないよ」

そう言いながら、ナツミは思っていた。出さなかったら本当に不幸が訪れるのだろうか。

うしろに座っていた③かわいそうなおばあさんのように。

でも、たぶんそうじゃない。あのおばあさんが不幸の手紙を出さなかったから子供が死んだんじゃない。出しても出さなくても死んだに違いはない。かわいそうだけど、その子はそういう運命だったのだ。

おばあさんがかわいそうなのは子供が死んでしまったからではない。もちろん子供に死なれるというのとはとてもつらい経験だろう。でも、人が生きていく中で、大切な誰かを失うということは絶対にありえないことではないはずだ。おばあさんが本当にかわいそうなのは、子供が死んだのは自分が不幸の手紙を出さなかったからだと思っていることだ。

そうやって、いつまでも自分を責めていることだ。誰が出したか知らないけれど、自分がどれほどひどいことをしたかわかっているのだろうか。

もし自分が五人に出すとすれば、その人たちをあのおばあさんと同じような悲しい目にあわせてしまうことになるかもしれない。

やめよう、とナツミは思った。わたしは出すのをやめよう。たとえ、お父さんとお母さんが離婚するようなことになっても、期末試験の結果が絶望的なものになっても、それ以外に思いもよらないような不幸に見舞われても、それを不幸の手紙のせいにするのはよそう。不幸の手紙を出さなかったからだなんて決して思わない。それはそうなる理由があ

っただけなのだ……。

気がつく、次はナツミが降りる停留所だった。慌てて窓の横についている降車用のブザーを押した。マキちゃんは
その次の停留所で降りるはずだった。

バスが停まると、通路側に座っているマキちゃんが席を立ててくれた。ナツミが出やすいようにしてくれたのだろう
と思っていると、小さな声で言った。

「④わたしも降りる」

どうしてかナツミには理由がわからなかった。

開いた降車用のドアからまずマキちゃんが降り、続いてナツミが降りた。

マキちゃんは降りたところに立ち止まり、バスが発車していくと、きっぱりとした口調で言った。

「わたし、出さない」

それを聞いてナツミは嬉しくなった。そして、マキちゃんと同じようにきっぱりと言った。

「わたしも、出さない」

二人は顔を見合わせると、少し照れたように笑い合った。

「じゃあね」

マキちゃんはそう言って、次の停留所の方に向かって歩きはじめた。

「じゃあね」

ナツミもそう言って、反対の方向に歩き出した。

歩きながら、ナツミは自分の気持が明るくなっていくのがわかった。そして、こう思った。わたしたちは背中を向け
て反対方向に歩いているけれど、小学生のとき一緒に神社に行ったときのように手をつないで歩いているような気がす
る。ナツミにはなんとなくそのときのマキちゃんの手のひらの感触が思い出せそうな気がした。

マキちゃん、大丈夫。不幸なんて、きつと来ないから。ナツミは心の中でつぶやいた。

バス通りを渡るため横断歩道の信号が変わるのを待っていると、向こう側の歩道の脇に郵便ポストが立っているのが
見えた。

カバンを左手に持ち替えたナツミは、右手でピストルのかたちを作った。そして、⑤人差し指の銃口を赤いポストに向けると、狙いを定めて声の銃弾を発射した。

「ダーン！」

(沢木耕太郎『あなたがいる場所』所収「銃を撃つ」新潮社)

問一 空欄「X」にあてはまる会話文として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

- ア やめなさい イ 冗談よ ウ 出すのよ エ ごめんね

問二 傍線部①「マキちゃんが探るような口調で訊ねてきた」とあるが、その理由を三十字以内で説明しなさい。

問三 空欄Aに当てはまる言葉として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

- ア 飾り気のない イ 屈託のない ウ 悪気のない エ 抑揚のない

問四 傍線部②「バスの乗客が耳をそばだてているのがわかった」とあるが、これはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

- ア 老夫婦の過去に何があったのか知りたいと思っているから。
イ 老夫婦を気遣って会話を聞いていないふりをしようとしているから。
ウ おばあさんがおじいさんに注意されたことで黙りこんでしまったから。
エ 突然話しに巻き込まれたナツミとマキのことがかわいそうでならないから。

問五 傍線部③「かわいそうなおばあさん」とあるが、ナツミがこのように考える理由は何か。それを端的に表現した言葉を、解答欄に合う形式で本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問六 傍線部④「わたしも降りる」とあるが、マキがこのような行動をした理由を三十五字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「人差し指の銃口を赤いポストに向けると、狙いを定めて声の銃弾を発射した。／『ダーン！』」とあるが、ナツミがこのような行動を取った理由はなぜか。その理由として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 自分の人生に不幸な出来事が起こったときに、それに対してあきらめの気持ちを持って対処していくことが、結局自分の人生をうまく過ごしていく方法だということを学んだから。

イ 自分の人生にどんな不幸な出来事が起こったとしても、それを乗り越えていかなければ、おばあさんのような不幸な人生を歩んでいくことになってしまうかもしれないと考えたから。

ウ 自分の人生に不幸な出来事が起こったときに、それを他人のせいにすることは間違っているし、ましてその不満を解消するために不幸の手紙を出すことは道徳上悪いことだと気づいたから。

エ 自分の人生にどんな不幸な出来事が起こったとしても、それにはそれなりの理由があるのだから、それを他人のせいにすることはせずに、自分で引き受けていくことにしようと思ったから。

問八 右の本文の特徴として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 比喩表現をほとんど使わないことで、話の展開に緊張感を持たせる。

イ 短い会話を多くつなげていくことで、テンポよく話が展開されていく。

ウ 老夫婦と若者という年齢的に対極にある人物を登場させることで話の深みを増す。

エ 女子高生を話の中心人物にすることで、深刻な内容をできるだけ和らげようとする。

〔三〕 次の古文をよく読んで、後の問いに答えなさい。

近ごろ、ある僧の家に、①大きな※1たちばな橘の木ありけり。実の多くなるのみにあらず、その味も心あるじことなりければ、主の僧、また、たぐひなきものになむ思へり②X。

かの家の隣に、年たかき尼、一人住みけり。重病を受けて、床に臥ふして、日ごろ物も食はず、湯水なんども、はかばかしく呑のみ入れぬほどになりけるが、この橘を見て、「かれを食はばや」と言ひければ、すなはち、隣へ人をやりて、「かくなむ」と言はせたりけれど、情なく、かたく惜しみて、一つもおこせず。この病人のいはく、「いとやすからず、②心わづら憂うれきことかな。病、すでに責めて、③命、今日・明日にあり。たとひよく食ふとも、二つ三つにや過ぐべき。それほどのものを惜しみて、④わが願ねがひをかなはせぬは、⑤口惜くししきわざなり。われ、極楽に生まれんことを願ひつれど、今にいたりては、かの橘を食はみ尽くす虫とならんと。その⑥いきどほりを遂げずは、浄※2じやうど土に生まるることを得じ」と言ひて死ぬ。

隣の僧、このことを知らずして、日ごろ過ぎけるほどに、この橘の落ちたるを取りて、食はんとて、皮を剥むきて見るに、橘の袋ごとに白き虫の五・六分ばかりなるあり。驚きて、「いづれもかかるなんめりや」と思ひて、見れば、そこらの橘、さながら同じ⑦やうになむありける。年を追ひて、かくのみありければ、「何にかはせむ」とて、はてには⑧その木を切り捨ててけり。

願力と言ひながら、さしも多くのYとなりけんことは、いみじき不思議なり。かれ、悪事を思ふは、くだり※3ざまのことなれば、かなひやすくは待はるにこそ。

《注》

※1 橘・・・・・・・・・・ここではみかんのこと。

※2 浄土・・・・・・・・・・阿弥陀あみだぶつ仏がいるとされる苦しみのない安楽の世界。

※3 くだりざまのこと・・・・悪い方向への願い。

（『発心集』巻八より）

問一 傍線部⑥「いきどほり」、⑦「やう」を現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えなさい。

問二 傍線部②「心憂き」、⑤「口惜しき」の意味として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

②「心憂き」

ア うれしい イ 不愉快な ウ 心配な エ 心にもない

⑤「口惜しき」

ア 言葉にできない イ 頭にくる ウ 悔しい エ 残念な

問三 傍線部①「大きな橘の木」の説明として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア みかんが多く実るだけではなく、その味も格別に良い。

イ みかんが多く実るだけではなく、その味も異なっている。

ウ みかんが多く実るには実るのだが、その味はいまいちである。

エ みかんが多く実るには実るのだが、僧が満足するような味ではない。

問四 空欄 X にあてはまる言葉として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア けら イ けり ウ ける エ けれ

問五 傍線部③「命、今日・明日にあり」とはどういうことか説明しなさい。

問六 傍線部④「我が願ひ」とはどのようなことか、二十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑧「その木を切り捨ててけり」とあるが、なぜ僧はこのようなことをしたのか、二十五字以内で説明しなさい。

問八 空欄 Y にあてはまる言葉を、本文中から漢字一字で抜き出しなさい。

問九 この文章の題名として最も適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 僧と尼の対決 イ けちな僧 ウ みかんの虫 エ 尼の復讐ふくしゅう

問十 この話の出典『発心集』は鎌倉時代初期に成立したが、同じ鎌倉時代に成立した作品を、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 竹取物語 イ 源氏物語 ウ 平家物語 エ 奥の細道

四 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 攻撃を阻む。 ② 立候補を促す。 ③ 炊事の準備をする。
- ④ 金貨を鑄造する。 ⑤ 先生の話を傾聴する。

五 次の傍線部のカタナカを漢字に直しなさい。

- ① ヒメギミの物語。 ② イナホが実る。 ③ マイゾウされた金塊。
- ④ 莫大ばくな額のサイム。 ⑤ 太平洋でホゲイする。

受験番号

氏 名

得	点

[illegible][illegible][illegible]

①	(つ)
②	(す)
③	
④	
⑤	

⑤	④	③	②	①
---	---	---	---	---